

---

## 俺と俺の嫁（エヴァ）と召喚獣だと？（仮タイトル）

K

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺と俺の嫁と召喚獣だど？（仮タイトル<sup>エヴァ</sup>）

### 【Nコード】

N4598Z

### 【作者名】

K

### 【あらすじ】

第0話の事前説明を良くお読みください

第4話（後編）は本日21日（水）22時にアップ予約済みです。  
どうぞお楽しみに

第5話もしくは閑話は木金中（22、23日）にアップします  
アップ予定変更がある場合は、早めにお知らせいたします

## アンケート募集内容

現在仮タイトルのこの小説の正規タイトルを募集いたします  
募集期間は12月30日まで

## 第0話〈事前説明〉

以下説明を全て読み、読んでもいいと思った方のみ本編をご覧ください。

『魔法先生ネギま！』の世界に転生し、原作を終えて、築いたハーレムの嫁達と楽しく暮らしていた！のだが、神が勝手に『バカとテストと召喚獣』の世界に飛ばしやがった！？しかも嫁の1人であるエヴァンジェリンと共に！？

主人公の名前は、ルルーシュ・T・ランペルージ？『コードギアス』のルルーシュの容姿を持つ主人公であるが、ギアスはもっていないからね？

無駄な能力達…死亡フラグのない世界じゃ、特になにも必要ないし！

そんな主人公と、エヴァンジェリンが織成す、まったりとした、文月学園での生活はどうなる・・・！？

### 更新不定期

誤字脱字の指摘や感想、質問等なんでもお待ちしております

魔法先生ネギま！の原作をご存知の方で、こんなエヴァ見てられない！という事がありましたら、お引取りお願いします

魔法先生ネギま！の原作をしっているほうが読みやすい部分があるかもしれません

コードギアスの原作等はしらなくても問題ありません、主人公の容姿、また、名前をお借りしているにすぎないので、知らない方は【コードギアス ルルーシュ】などで検索して、容姿だけ確認していただければ、読んで行かれる上で想像しやすくなるかと思えます

また、不適切な表現や、何か問題があるようなことがありましたら、ご報告ください。確認し次第対応させていただきます

また、個人的にこんな表現が嫌だとか、こんな話しの流れ嫌だというような嫌悪感、また見てられないと思うようなことがありましたら、速やかにお引取りください

作者は物語を書く者としてはまだまだ一般人レベルですので、表現力や、話の転開等しっくりこない部分も多々あると思います、どうぞ温かい目で見ただければと思います。アドバイス等は随時お待ちしております

## 第0話〜プロローグ（前書き）

K「はい、ということで、行ってきなさい」

？「え？何？何？」

本編開始

## 第0話〜プロローグ〜

はあ・・・

今度はバカテスか・・・

俺は現在、文月学園近くのマンションの一室にいる

そして俺の目の前にある手紙にはこう記されている

『まいどご苦労ご苦労』

ワシじゃ、ワシ・・・そう！そうじゃ、生意気な貴様を毎度毎度

転生させていやっている、ワシじゃ』

ワシねえ…ワシさんなんて知り合いいたか？

鷲？

飼ってた記憶はないな

『いや、天界で会った神じゃ

前はフラグ乱立の世界、魔法先生ネギまじゃったの

今回はそういった余計なものは心配するでない  
いたって普通のバカとテストと召喚獣の世界じゃからの』

うん…神のおじさんね、あの電波オヤジね

そっぴや、ネギまの世界にいて、無事原作も終わらせて数十年ほど  
生活してたと思うんだけど・・・？

って待て、俺の嫁達はどうなった？

仮契約で、不老不死の効果がシンクロしてたはずだが

現在俺が、別の世界にいるってことは…



『ああ、嫁達のほうは幸せに暮らしておるよ

まあこの世界で100歳ぐらいまで生きて死んでくれたら、向こうに帰すからの

一応、こちらで長期の仕事という扱いで、当分帰れないことを伝えてあるし

まあ時間系列が異なるから、こっちでの100年が向こうでの一年ぐらいにしてあるわい』

ほう、なんというご都合主義具合だ

「それは、便利だな」

「うえ？」

気づかなかった、となりに座って手紙と一緒に覗く存在が居たことに

エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル

俺の嫁の1人だ

「エヴァ？」

「うん？なんだ？そんな驚いた顔をして  
その手紙に書いてあるだろう？」

ん？エヴァが指した先には、読んでいた手紙

続きに書いてあるのか

『とは言ってもものう…死んだわけじゃないから、能力調整がで  
きんのじゃよ

暴走などもしかねないし・・・ということじゃ、エヴァン  
ジエリン殿をお主のストッパー役として一緒にその世界に送っ  
ておい  
たからの

まあ半分休暇とでも思っ  
て楽しむがよい』

はあ……

でもよ…この原作って高校だよな？

見た目小学生のエヴァを送ってくるぐらいなら、あすにゃんとかさ  
…あると思っ  
んよ……っ  
てもう言っ  
ても遅いな

『ということじゃ、能力制限がついてないからの、その世界での能力使用等は充分注意をはらってくれの…不老に関してじゃが、認識阻害で将来的には、違和感をなくして生活してくれの

ちなみにやつてもらうことは、特にないのじゃが

その世界の住人2人がたぶん他の神のミスで、魂情報ごと消えてしまったようでの、その埋め合わせなんじゃ

ということで頑張れ

By神のワシより』

「へえ」

「それで、よくわからないまま、変なオヤジに仕事の付き添いとして連れてこられたのだが、ここは別世界なのか？」

ああ、エヴァにも説明しなきゃいけないし

というかこの時点で俺の名前も俺の特徴もなにも出てきてない気がするし…

まあいいか

「とりあえず、この世界は、そうだな…簡単に言えば旧世界の表の世界のみしかないと考えてくれればわかると思う」

「ほう…魔法はないのか？」

「ないよ、麻帆良のように超人じみた中学生もいないし裏社会というなら、ヤクザ、マフィア、それから外国とかには暗殺を請け負うような本当に裏に準じている人もいるんじゃないかな」

「ほう……それではゆっくりルルと過ごせそうだな」

おお、エヴァ！俺の名をやっと呼んでくれたか

俺の名は、ルルーシュ・T・ランペルージ

あのギアスを使い祖国を潰そうとするあのお方の偽名を、一部だけいじっただけです

何故そんな名前か…簡単です、容姿があれなんですもん

一応身体能力は、全体的に高いと思いますね、ネギまの世界で死線をくぐりぬけてきましたから

その他能力ですが、空間把握能力EX、金運EX、恋愛S（EX）（詳細数値化不可）、脳波伝達速度SS以上、魔力はチートバグキアラ並、気はラカンほどではないがそこそこある程度、動体視力SSもしくはEX判定、ご都合主義値測定不能、主人公補正測定不能

がそなわっております

そうですね、こんな平和な世界で使うことがあるかわかりませんが、  
武力的な面での説明を入れましょうか

得意魔法属性：全属性　一番適正があるのは闇、次に何故か治癒や  
結界などの補助魔法の適正が高い

技：カン力法取得済み、居合い拳も可能、京都神鳴流剣技使用可能

武器：特になし

特殊能力：ミリオンゴッド（金運値異常特性）、魔王様（眠い時、  
もしくは眠りを邪魔された時光臨）、ニコナデポ（微笑みながら撫  
でると発動）、ガッシュベルのティオの術が使用可能

とまあそんな感じですね、一応武器もありますが、銃刀法違反にな  
るのは嫌なので、影の倉庫に封印します

「エヴァ、これからどうしようか」

「さあな、神とやらのもう一枚の手紙に書いてないのか？」

もう一枚の手紙だと？

はっ！もう一枚あった…

『P s . お主等の戸籍は用意してあるし、特別に、元の世界の貯金から少し降ろして、こちらの世界の銀行に移してある  
それと、もちろん、わかっておるじゃろうが、文月学園にかよってもらうからの…でなければ話がすまん  
ということで、転入試験は今日じゃからの』

今日だと？

今何時だ…

「エヴァ、今何時だ？」

「神からの荷物に携帯が入っていたから、それで確認したらどうだ？」

神からの荷物だと？

ああ、目の前に普通にあったわ

手紙に気をとられすぎてて視界に入らなかった

中身をあさる

銀行のカード＋通帳（俺名義で一組）、健康保険証（エヴァと俺の）、スマートフォン（2台）、現金30万（茶封筒に、『手持ちないと不便じゃろうから、少しおろしておいたからの』と書いてある）

ほう…

「この携帯2台あるが、1台私が持つということか？」

「そうだろうな・・・魔法があるような世界じゃないから、自然魔力が多くないから、念波とかより携帯の方がいいだろう」

「そ、そうか…使い方覚えられるかな……」

そう、エヴァは重度の機械音痴である

原作のエヴァはどうか知らんが

ここにいるエヴァンジェリン・A・K・ランペルージはそうなのである

「まあ仕方ないさ、少しずつ覚えていけばいいだろう?。」

「そうだな、それで、時間を確認したかったんじゃないのか…?。」

「あ、ああ…」



ん……？流れるにさ、もう時間やばい！遅刻！

Fクラス入り確定！

とかかと思っただが……そんなことはないようだな

ということとで時間があるので文月学園のことを一通りエヴァに教えたのだが

「ふんっ、ならばAクラスという最高の環境で、過ごそうじゃないか！」

「そうだねえ……ってエヴァ、勉強できるの？」

規模が違う、麻帆良での学生時代エヴァのテストの点数は100点満点中60〜75点前後かと思う

一方、こちらの文月学園は、時間内なら問題数無制限だ

「あれは、やる気がなかったし、何度も中学生をやらされていれば勉強なんぞしたくなるわ！だが今回は違っただろう？それなら、まっとうに学校にかよってやろう」

まあ確かに数百年も生きてきたからな、そこらへんのよりは頭いいだろう

「エヴァ、総合教科で3000点以上あれば、Aに入れると思うよ」

「そういうルルは・・・ってお前、頭いいんだっただな」

そう見たいですね、大元のルルーシュさんの頭脳でもうけついでなのでしょうかねえ

「じゃあ3000点以上でがんばろうか」

「そうだな、2人並んで授業を受けたいな／＼」

ええ、妻にしてから、エヴァはちよくちよくデレますね…かわいい・  
・  
・

## 第0話〜プロローグ〜（後書き）

K「さて、いかがでしょう、見切り発車過ぎる今回の作品！

ノクターンにあげている小説も更新が滞ってる中…アップしちゃった

ええ、前回バカ姫という二次作をあげたのですが、修正がつかなくなり、打ち切りとさせていただきまして、修正しようかと試みたのですが、なんか全然別物思いついちゃったから、アップしちゃう！ということで今回のバカテス二次作あげさせてもらっております」

ルル「それで、主人公の名前こんなんでもいいのか？」

K「たぶん？それにミドルネームTだし〜Tだし〜」

ルル「そんなことより、魔法先生ネギまの時の話しはアップしないの？」

K「え？ああ、ね……きつと……いつか……ね……」

ルル「いきなりですが、ご覧頂いた方に、お伺いしたいのです！」

K「したいのです！」

ルル「文月学園の点数の設定なのですが、何点〜何点は何クラスで〜とかいいますね、あれってどんな感じなのかいまいちゃわかってなくてデスネ…教えてください〜！それと、総合教科って、どの教科が含まれて計算されてるの？っていう疑問ですね…お答えいただ

ければと思います」

#### 質問回答募集

？何点〜何点が何クラスで〜という主な目安  
？総合教科に含まれている教科

第0 5話 マグロが丸々入る冷凍庫なんて市販されてないと……（前書き）

K「おはよん」

ルル「おはよう」

K「まさかの0 5話ww原作開始までいけなかった・・・」

ルル「ちよつとびつくりしたわw」

K「ではでは本編どうぞ」

本編開始

第05話 マグロが丸々入る冷凍庫なんて市販されてないと……

ひとまず、生活に最低限必要なものと、朝食を求め

エヴァとコンビニへ行き、家に戻ってきた

TVもないし、PCもないし……

エヴァは無言で俺の膝の上にのり、パンを食べている

ルーテストが終わったら、電化製品を買いにいった、あとは衣類か？

22

この家、寝室にキングサイズのベッドが一つ

リビングにテーブルとソファが二つ

それ以外のものがなにもないのだ

ん？制服くないか？

普通用意しといてくれたりするよね？神のワシさんよ？

『ワシはワシって名前じゃないわい！』

はっ！電波が飛んできた、やはり電波ジジイだったか

『いや、ワシ目の前にいるじゃん？』

ん・・・俺とエヴァのまったりとした朝食の時間を邪魔してきた、電波である

どうやら、エヴァには現在見えてないらしい

『まあよい、もうとうぶん出てこんわい  
制服はと数着の下着、衣類等を、今クローゼットの中に入れてき



たからの

それだけじゃい！もうワシはいく！頼まれても、電波呼ばわりするようなお主の元にはおりてこん！！そいじゃの』

言いたいことだけ言って、スッと消えてしまった神

言いたいことだ言い放っていくとは……まあいい、まあいい、もう電波を受け取ることも数十年はないだろうよ

エヴァと俺は制服に着替えも……エヴァのかわいさに雄叫びをあげたのは、悪くない！

とまあここまではいいんだけどさ、文月学園ってどこよ？

ああ、スマホのマップかなんかで見ればいいか

なんとかたどり着くことができ、職員室にお邪魔して転入試験の意を伝えると、ちゃんと話しがとおっていたようで、黒光りするとても大きい、カクカクした人型ロボットが対応してくれた

「今、クラス分け試験実施中で空き教室がなくてな、補習室で試験を受けてもらう

こっちだ、入れ」

なんか入るの嫌だね・・・補習室・・・

「そうだ、自己紹介が遅れたな、教育指導担当の西村だ」

「な、なんだと？ルル、人外かと思ったが、ちゃんとした人間のようだよ！」

ちょ、エヴァ、それ口に出しちゃダメだって………

ええと、軽く説教を喰らいました俺も…

ということで、転入試験を受けています

どのくらいあれば転入試験合格かしらないけど

Aクラス並なら問題ないでしょ

3500〜3800程度にしておけばいいかな

テストしていて思ったのだが、確か原作で姫路が回復試験を行っていた様子があったはずだが

体弱い女の子っていう設定だよな？

なんであんな速度で回答できるんだ？

「そこまで、2人ともお疲れ様  
まあはつきりとはいえないが、これだけの問題用紙を積んだよう  
だからな…転入は可能だろう  
後日、合否を連絡する」

ということでも無事試験終わりました

エヴァも結構解けてたみたいだし、まあ大丈夫でしょう

「エヴァ」

「どうした？」

「とりあえず、家電買いに行つて、後日届けてもらつとしようか」

「そうだな…うーんそつちは任せるから、私は調理器具とか買いに  
いつてくる」

エヴァちゃん料理得意なんですよねえ

俺に美味しい料理を食べさせたいとか言つて…いや、俺だけに食べ  
てもらいたいと…懸命に料理の勉強してたなあ

「そうか、じゃあこれお金〽️終わり次第連絡つてことで」

「うん、冷凍庫は、ちゃんとマグロー匹入るぐらいのにしてくれ」

ちよつと待て、マグロー匹入る冷凍庫なんて…一般家庭用が売つて  
るわけがなかるう？解体したあとのマグロを保管するための冷凍庫  
ならともかく

絶対エヴァのことだから、丸々一匹入るものをご所望だ…

「エヴァ？そんなサイズは、業務用ぐらいしかないと思うし…」

「ぬ、そうなのか？んー…じゃあ出来るだけおおきなのに…大きい  
と高いものがとれないじゃないか！」

「んー…まあ高いものは俺がとればいいし、気にすることないんじゃない？」

「そ、そつだよな！ルルがいるなら何も問題はないっ！  
よし、じゃあ大きいのを買ってきてくれ」

ということ、おじいさんは、家電量販店へ

おばあさんは、デパートへ…

ああ、ヤバイ、冗談でもおばあさんなんて言ったらエヴァにフルボッコされてしまうな

忘れよう

気を取り直して、家電量販店で買い物……

冷蔵庫、TV、HDD内臓BDレコーダー、炊飯器：これは、3、4個買って行ってエヴァが気にいったの使わせるべきだな

えとーあとは、エアコンはあるからいらないな、ああ、加湿器、空気清浄機、それからPCを二台買って

え、何？ここでネット回線の契約もできるの？え？パソコン安くなるの？おお、そうかそうか



後日配送の手続きを済ませいざ終了！

店から出て、エヴァに連絡を…ドン…「あ、すみません」

人にぶつかってしまいました

「ああん？てめえテキトーにごめんなさいして許されるとおもって  
んのか？」

はあ……やべえ、何この昔ながらのからみ方みたいな感じのことを  
してくる人www

ちょーうけつwww

じゃなかった、ちょーうけるーーはいはい、もういいよね

「すみませんでした。では、急いでのこの辺で…」

めんどくさいから下手下手にね

「ったくよくさつさとうせろ、ボケエ！」

と、酷い返答を喰らったが、まあ案外素直に帰してくれたな  
よかったよかった

エヴァと合流し、一度荷物を家に置きに行つて、夜ご飯は外で食べることにした

「ルル、美味しそうな匂いをする」

何を食べるか、相談しながらエヴァと町を歩いていると、エヴァ

が突然そんなことをいいだした

「ん……」

っ……!!

このっ、匂いはっ!」

「なあッル、お前そんなわざとらしいリアクション取るような奴だっ  
たか?」

「コメディー補正【弱】がかかっているせいだろうっ……気にしないで  
くれ」

「そ、そうか……ところでこの匂いは……」

「俺には感じないという事は、血か?」

町を歩いて血の匂いがするってなあ……飲食店で使われている肉  
類の血か?

「……ッル、たぶん厄介ごとじゃないか?」

「ん?」

きゃあっ!

「悲鳴かな？」

「そうみたいだが？ルル、助けにいくのか？」

「そうだねえ、そうしょうか」

＼美春 Side＼

現在私は、お父さん…じゃなかった豚野郎に追われている最中です

いつものことなので、何故こうなったかなんて記憶にありませんです

「ミハルミハル……サア、パパトホウヨウヲ……………」

「気持ち悪い！くんな！豚野郎！！」

「ミーーハーールツ！！！！」

「私の名前を大声で呼ぶなです豚…きゃあっ！」

私としたことが、つまずいてしまいました

なんとか、体制を整え転ばないようにはしたのですが、バランスを取ろうとした

時に、手を地面に擦ってしまったようで、小さな擦り傷を作ってしまった

美春 Side END

悲鳴が聞こえた方へ向かうと、制服を着た少女がおっさんに追いかけられている

シーンだったわけだ……

「えうつ!？」

その少女を抱きかかえ、裏道を使いそこそスピードを出して走り抜ける

「ちょ、なんなんですか！豚野郎が美春に触れるなんて！」

なんか文句言われてるんだけど…あれ？助けてあげた側だよ？俺・  
・・

いや、まさか追いかけて襲われるみたいなプレイを楽しんでいたわけじゃないよね？

「あー助けなくてよかったのか？」

「え？ああ、た、助けてくれたのですか…で、でも、降ろしてください！」

男に触れられているなんて嫌悪感はありません！！」

そう言えばこのこみたこと…ああ、暴走縦ロールの清水美春がつていうことは、さっきのガラ・ペデイスの店長であるお父さんか？

「とりあえず、少し距離は離れたかな…」

美春を解放します

「二度と触れんな豚野郎！ともつと文句を言いたいところですが、一応助けてくれたことには感謝s「ミハルツーーーーー！！！！！！」したいところですが、逃げなくてはいけないようなので失礼するです」

はあ……そうやってどれだけの時間にげてるのかねえ……その時間を勉強に費やせばまだ有意義な時間だと思っただけど

「キ、キ、キサマガ、ミハルニテヲダス、オロカモノカ……コ  
ロ、コ、コ、コロス、コロスコロスコロスコロス……」

「俺敵だと認知された？」

数百メートル離れた位置から全力疾走してくるおっさんが、明らかに俺に対する敵対心を向けてきた

それにしても声でかいな……

「そうですわね、逃げた方がいいかと思えます」

「エヴァー木刀か竹刀あるー？」

「？」

俺はエヴァに話しかけたのだが、横で美春は何言ってるのこの人？  
つという表情を浮かべている

「木刀でいいか？竹刀だと下手するとあれにはきかないかもしれないかな  
いからな」

ふと俺の横に現れたエヴァに驚いたようで美春は、エヴァを数秒の  
間見ていた

木刀をエヴァから受け取り、構える

「ちょっと、何する気ですか？  
あんなの相手に出来る人間がいるわけないです！  
さっさと逃げるべきです！！」

美春からの忠告は無視して、美春のお父さんと思われるおっさんに  
向かって走る

「京都神鳴流      斬岩剣ッ！」

斬岩剣    気を刀に纏わせ斬る技



「コロスコロスコロスッ!!」

木刀と拳がぶつかる

通常であれば、拳の骨が砕け散るところなのだろうが……

受け止められたってどういうことだ…コメディー補正キャラ強すぎ  
だろ

拳と木刀のぶつかり合いが生じる

うーん…まさか魔法を使うわけにもいかないし

「ルル!そいつは明らかに対武器戦の戦闘に慣れている!肉弾戦に  
切り替える!」

ほう、エヴァちゃんナイス助言

木刀をエヴァの方に投げ、一瞬で手をズボンのポケットに入れる

居合い拳である

居合い拳 手をズボンのポケットに入れて、そこから素早く居合いの要領で拳

を打ち出す技

距離を開きつつ、中距離でも扱える居合い拳を放ち続ける

何発かクリーンヒットしたようで、暴走化したおっさんは気を失い倒れた

「まったく、こんなめんどくさいのがいるとは…」

「ホントだな…こんなの普通の奴には倒せないぞ？殺気も一般人のそれを超えていたしな」

「さて、エヴァ、そろそろご飯食べに行こうか」

「そうだな」

何か忘れているような…

「あの豚野郎を、豚野郎が倒すなんて…  
あなた一体何者です？」

あ、美春のことすっかりわすれてた

まさか一般人に木刀とはいえ、斬岩剣を拳で止められるなんて思っ  
てなかったから熱くなってたわ……

「ルルーシュ・T・ランペルージ……まあ覚えなくていいよ  
あれの処理は任せるよ、君の知り合いみたいだし」

「ちよつ、待ちなs……」

何か言っているが、あのオヤジとできれば二度と会いたくないの  
で、これ以上

関わる事をやめ、さっさと逃げるようにその場をさる

第0 / 5話 マグロが丸々入る冷凍庫なんて市販されてないと……（後書き）

K「清水美春との出会い編でもありました」

ルル「人外美春パパはヤバイね……」

K「とまあ、ぶっちゃけかいてて、主人公の口調が元のルルーシュにあつてないのが気になるところですが……まあしかたないよね……?」

ルル「どうにか、読者の方には脳内変換していただいて……」

K「さて、話は変わりますが、第0話プロローグしかアップしていないにもかかわらず、お気に入り3件の登録をいただきました。ユニークアクセスは既に200と……想定外に伸びていたのびつくりですね

ありがとうございます。

作者といたしましては……贅沢を言っしまえばどんな些細なことでもいいので感想なんかいただけたりと、嬉しかったです」

ルル「では、この辺で失礼します

ご覧いただきありがとうございます！」

第1話 エヴァンジェリン・A・K・ランペルージ（旧姓：マクダウェル）…姓

K「ちゃっちゃー」

ルル「はい、こんばんわ」

K「キリが悪いかったり、話しの転開仕方が悪かったりするかもし  
れませんが、どうぞご覧ください」

本編開始

第1話 エヴァンジェリン・A・K・ランペルージ（旧姓：マクダウェル）…姓

テストを受けて数日後、携帯に合格という連絡が入り

無事転入できることとなった

通学初日・・・文月学園新年度の初登校日

もうすでにこの世界での生活に慣れ、生活する上で不便はなくなつたところであつた

エヴァと共に制服に着替え、文月学園に登校……

学校に近づくにつれ、文月学園の制服をきた生徒が目立ってくる

「なあ、ルル。私達への視線が多くないか？」

いやーそれは仕方ない…エヴァが制服着て歩いてたら、そりゃ見るわ小学生と見間違うかも知れない容姿だし

それに美少女だし

金髪で外国人だと一目でわかるし

注目はエヴァに集中……し、してないだー！？

エヴァへの視線も多いが

何故俺への視線が……いや、少なからず、殺気まがいのものや妬みがまざった視線を飛ばしてくる者もいるな

「エヴァがカワイイからだと思うよ」

「そ、そうなのか？／／／

いや、でも、私にはルルがいるからどうでもいいな」

一瞬戸惑う表情を見せたが、すんなり普段の表情にもどったな…

むしろ、見てくる奴らを睨みつけているような……

数分後文月学園に無事到着

入口には、黒光りする大きなゴツゴツとした人型ロボットが…じやなくて、西村先生がどんと構えて立っていた

「お前達は確か、ランペルージ兄妹だったか？」

名前は覚えてたみたいだけど、勘違いしてるなあ

「違う！ルルと私は配偶者だ、つまり夫と妻だ！  
ちゃんと書類に書いてあっただろう？」



「え？そ、そうなのか、それはすまない…」

エヴァちゃん、兄妹に見られると怒るのね…っっていうか俺とエヴァ似てないってww

しかも俺なんて黒髪じゃん？

「エヴァ、まあ落ち着いて」

「うん……」

「ほら、クラスの振り分け結果だ、転入試験の成績が振り分け試験代わりとして代用されている」

名前が書かれた、二つの封筒が差し出された

そのうち一つが俺、もう一つがエヴァのだ

それを受け取り、開くと『Aクラス』と表記されていた

チラッとエヴァのほうを覗くとこちらも『Aクラス』

無事Aクラスになれたようだ

「よかったエヴァも俺もAだな」

「当たり前だ、このぐらい楽勝だ」

と堂々と胸を張るエヴァ

うん、カワイイねえ……

「ところで、ルルーシュの方だが、転入して初めから大変かも知れないが、頑張れよ」

「何がですか？」

何を言ってるんだ？

理解してない俺に気づいたのか、西村先生は俺の振り分け結果の書かれた紙を指差す

『Aクラス』

ん？何？これがどうか……

『Aクラス』のちょっと下の方に、小さくこう書かれていた

『次席』

「はあ？ちよつと待てよ……何故だ？」

「今回二年生で総合教科得点が4000点オーバーなのは、お前とAクラス代表だけだ」

4000点オーバーしたつもりないんだけど……まあいいか

「じゃあとりあえず、こんなところで長話もあれですからそろそろ失礼しますね」

「そうだな、まずは職員室に行つて、高橋先生のところへ行つてくれ  
お前達は転校生だから、担任の先生が案内してくれる」

「そうですか」

西村先生の指示の元、職員室を訪ねて高橋先生と合流する

「あなた達が、ランペルージ君とランペルージさんね」

もう一度確認しよう

俺の名はルルーシュ・T・ランペルージ

エヴァはエヴァンジェリン・A・K・ランペルージ（旧姓：マクダウェル）

実にややこしい

「自分の事はルルーシュで構いませんよ、呼びにくいでしょうし」

「私も名前で構わない」

「そうですか、では、改めてルルーシュ君、エヴァンジェリンさん、あなた達2年Aクラスを担当します高橋といいます

あとは学年主任も兼任しています

教室まで案内しますので付いてきて下さい」

高橋先生：キリッと真面目そうなメガネをかけたスレンダーな女性  
コンタクトにして、髪形を変えたら普通にモデルやグラドルなんか  
できそうだなあって思う  
美人さんである

一つの教室の前まで案内されると、少々待つように伝えられ、廊下  
で待機する

暫くすると入室を許可された

たぶん先に先生自身の自己紹介を終わらせたのであろう

教室に入ると、驚いた

勉強する場所とは思えない設備

わかってはいたのだが、実際目にとるとあまりにも無駄に設備費がかかっていることが見て取れるほど、環境が整えられており、驚愕してしまったのである

「自己紹介を……」

高橋女史に促がされる

「ルルーシュ・T・ランペルージ、何故か一応次席らしいが……この学校のこともよくわからない、皆フォローを頼む

それと、ルルーシュと呼んでくれると助かる」

「エヴァンジェリン・A・K・ランペルージ、先に言っておく、ルルとは兄妹ではないから間違えるなよ？私はルルの妻だからな！」

うん、西村先生に間違えられた時から、自己紹介辺りで言うかと思っただけ、やっぱり先に宣言しておくんだね

エヴァの言葉にザワ付くなか、1人のメガネをかけた男子生徒が拳手してから立ち上がる

「久保利光という、質問いいだろうか？」

「はい？」

「日本での入籍は、男性満18歳、女性満16歳以上と定められている

僕達は高校二年生。エヴァンジェリンさんの方は、満16歳を超えているとしても、ルルーシュ君の方は、18にはなっていないはずなのだが、どういうことだろうか？」

そうこれだ、だが、日本国内ならの話しだったらだ

「まあ日本国内で入籍したわけじゃないからね

海外だよ、どこでという明確な場所は秘密にしておくが、例えばアメリカは州によって年齢制限が異なるし、スペインでは男女共満14歳、それに年齢制限がない国もあるらしいし」

「なるほど、そうか説明ありがとう」

納得したのかすんなり席に座る

他の生徒達もどうやら納得したようだ

「では、後ろの空いてる席に2人とも座ってください」

高橋先生の指示でエヴァと並んで、空いていた席に座る

「では、皆さん自己紹介を……」

自己紹介長いな……趣味とかさ、好きな物、嫌いな物とか聞いても、覚え切れないだろ普通……

改めて俺の番

って、また自己紹介するの？

「えと、じゃあ改めて、ルルーシュ・T・ランペルージ



とりあえず、そうだなあ…エヴァに危害を加えたり、嫌悪するよ  
うな発言をしたら、死ぬと思え……」

いや、俺がやるわけじゃなくて

エヴァにサクッと殺られると思うから、そついう意味での忠告ね・  
・

それから少しして、またエヴァの自己紹介

「なんだ？またするのか？

エヴァンジェリン・A・K・ランペルージ

あーそうだ、一つ忠告しておく…ルルの眠りの邪魔だけはするな

……頼むから………」

え？なんでそんな切実な思いを込めて言ってるの？エヴァちゃん…？

1人を除く全員の自己紹介が終わった

最後の1人は、主席である彼女だ

容姿端麗成績優秀

運動神経もなかなか…というか下手すると暗殺業とか、拷問による尋問官とかになれそうなほど

な、大和撫子ということばがぴったりな

黒色ロングストレートのキレイな髪をなびかせる

大人しい少女

霧島翔子である

「…霧島翔子、クラス代表……私だけではできない事もたくさんある、皆その時は協力してくれると助かる」

と一礼

自己紹介が終わり休憩時間

エヴァは、今夜のディナーを何にしようか考えているようだ

さて、俺は…ゲームだな！

N Sでポケンを……

そう言えばジム戦前でセーブしたんだっけ

と本来持ち込み禁止であるゲーム機を取り出しプレイしはじめる

「ルルーシュ・T・ランペルージ…ゲーム機は持ってきちゃいけ

ないモノ」

いつの間にかスツと俺の目の前に立つ、霧島さん

いやー凄いね…足音一つないなんて

「ゲームのBGMや効果音はOFFにしているし、ボタンのプッシュ音も立てないように押しているし、今は授業中ではない迷惑かけているならまだしも、特に問題はないと思うが……テストの成績が悪いわけでもないしな」

「…ルールはルール…守らなきゃダメ」

「そうか、なら君が隠し持っている、スタンガンもよろしくないのではないかな」

確かに護身用と言えば、霧島グループのご令嬢だし、仕方ないと言えば仕方ないし

今の世の中何が起こるかわからないからな

でも、出力が護身用にしては大きいものだと思うのだが、違うかな？」

というか、スタンガンだけじゃなくて、他にも色々持ってるだろ……

一瞬表情が揺らいたが、少し考えたあと、霧島さんはこう言った

「…わかった、私が言える立場じゃないかも知れない  
先生に注意されたら、大人しくやめて」

「わかったよ」

大人しく引き下がったねえ

「ところで、霧島さん」

「…なに？」

「眠いんだけど、寝ていいかな？」

「…それは困る、この後授業ある」

「そうか…じゃあ保健室行つて寝てるね  
先生には、体調が優れないので保健室に行きましたって伝えとい  
てね」

「……………」

注意したいのだが、エヴァの『ルルの眠りだけは邪魔するな』とい  
う言葉で迷っているのか

それとも何か別のことを考えているのか

黙ってこちらを見ている

「ルルーシュ君、代表をあまり困らせちゃダメだよ」

1人の少女が新たに近づいてきた

「工藤さんか、カワイイ子を見ると、ついからかいたくなっちゃうんだよね」

「あははっ、ボクもそれ少しわかるかも」

彼女は工藤愛子：保健体育の点数が高い

ボクっ娘である

「ぐはっ！！」

おいおい、なんだよ？

すぐそばで、男子生徒の声が聞こえた

いくつかのソファ―とテーブルを巻き込んで、吹っ飛ばされた形跡がある

エヴァちゃん、力加減し…したけどまだ強かったのね

「貴様如きが、ルルを『あんなの』呼ばわりとは……

私のこの程度のストレートをかわすこともできず、防ぐことも出来ないような奴が、ルルを下に見てるんじゃない

それと、貴様、ルルのことを『もやし男』と呼んだが、お前が1万人いようが、ルルの方が強いわ！！二度と私に話しかけるな、下衆が！」

エヴァちゃん…だから忠告しておいたのに

「こ、こんなもやしが俺の一万倍の強さだと？

ふざけるなよ！」

ああ、モブががんばるねえ

って俺に向かってくるのね

よくわからんが

シュパン！

と顎に軽くアッパーを入れる

一般人にどれだけの力を入れて良いものか…

コメディー補正がかかって、限界があるかなあ？

どうなんだろうか……



コメディー補正って強ければ強いほど

ボロボロになっても、次のコマではピンピンしてたりするよね

うーん、どのぐらい力を込めようか

よし、少しずつ出力をあげていけばいいか

ん？

気が付いたら、男の顔はボコボコ…口と鼻から血を流していた

考えながら、軽くあしらってるつもりが、それでもダメージになったのね……

「ひゃんで・・・きょんひゃ、ひゃひゅひ・・・！」

口元とか頬とかはれて、何言ってるかわからないとか・・・ギヤグ漫画で見た以来だなあ

「君から向かってきたから、正当防衛だよ？」

まあエヴァは先に手を出しちゃったかもしれないけどさ

それは許してあげてよ、俺が忠告したのに聞いてなかった自業自得としてさ」

男子生徒は、数十秒硬直すると、突然教室の外へと走っていった

「エヴァ、っていうか、あれ誰？」

「さあな、このクラスの奴ではないと思うぞ、自己紹介の時にいなかったようだしな」

「ありや、いなかったの。それなら忠告もなにもしないわな」

横転したテーブルやソファを元にもどしていく

まったく…いきなりめんどくさいこと…エヴァがカワイイのはわかるけどさ

エヴァの沸点コトによってはかなり低いんだから、やめてくれよな

……

その後、何事もなく一日目終了……

と聞いたかったのだが、FクラスがDクラスに宣戦布告

つまり試験召喚獣クラス間戦争を仕掛けたのである……！

第1話 エヴァンジェリン・A・K・ランペルージ（旧姓：マクダウェル）…姓

ルル「いやー、やっと原作キャラ出始めたね」

K「といっても、翔子と愛子と高橋女史が少しずつだけどね」

ルル「優子はまだでなかったね」

K「次回辺りに」

ルル「モブキャラを出させた意味は？」

K「エヴァちゃんが、ルルを愛していることをわかっていただくために？」

ルル「はあ……俺がゲームをやりだしたのは？」

K「裏設定によるものですね、今回プロフィールのアップは今のところ予定しておりませんが、エヴァがゲーム好きだから、それに付られて、ルルもゲームにはまっているという設定でして……」

ルル「なるほどね」

K「ということで、今回もご覧いただきましてありがとうございます

又、お気に入り件数、PVアクセス、ユニークアクセス共に順調に伸びていること大変嬉しく思います

今後ともよろしく願います」

第1・5話〜第1話のちょっとした裏側〜（前書き）

K「こんばんばんわ」

Eヴァ「ん？なんだ？この空間は？」

K「前書き枠と後書き枠の世界へようこそ」

Eヴァ「『ようこそ』なんてもてなすぐらいなら、お茶ぐらいだせ」

K「お茶こぼして、データ消失すると困るので無理です」

Eヴァ「……まあいい、それで何故私がこんなところに呼ばれたのだ？」

K「作者の気分です」

Eヴァ「ルル……誘拐されちゃった……助けて……」

K「いやいやいやいやいや！……そんなことしてません！とにかくカンペ通り本編にふってください……」

Eヴァ「ふんっ！仕方ない……本編どうぞ」

## 第1・5話〜第1話のちょっとした裏側〜

＼エヴァ Side＼

文月学園の転入初日、ルルと共に登校したのだが

テストを受けたとき対応した、一見人外と思える男が学校の入口に立っていた

その男は、腹立たしいことにルルと私のことを兄妹だと間違えた

見た目が違うだろう？見た目が！

バカか、この男は…

教師がこれほどなら、生徒も間違える奴もいるかもしれないな

ルルの後について職員室に行き、担任だという高橋女史に連れられ  
教室へ向かった

教室の設備の感想は……なんだこの無駄な設備投資は！

という一言に限るな

だがしかし、これほどの設備だからこそ、勉学に励みAクラスに入  
ろうとする奴もいるのだろう



自己紹介で、ルルとは結婚していることをしっかりと伝えたいし、問題は無いだろう

何故が無駄に二回目の自己紹介では、ルルに関する忠告をしたし

これで静かに暮らせそうだ

休憩時間、夜ご飯のメニューを考えていたら何人かの男子が、声をかけてきた

適当に会話しつつ、メニューに悩む

適当にあしらわれているのにわかったのか、少し会話して満足したのか

1人を除いて立ち去っていった

「っていうか、あんなのどこがいいわけ？

もやし男じゃんww

君みたいな、か弱い子あんなのじゃ守れないでしょ？

あれとは別れてさ、他の人と付き合えば？俺とかさ？」

最後までしつこく残っていた男は、そう軽く言ったのだ

だがそれは、ルルへの侮辱だ…それに私が、か弱いだと？貴様のよ  
うな男より遥かに強いわ！！

咄嗟に拳を突き出した

もちろん、ルルから充分力の加減については聞いていたし抑えたの  
だが

抑え方が足りなかったらしい、反応もできず男に拳が当たり

軽くふつとんでしまった

まあいい、ここできつく言っておけば、バカなことと言わなくなるだろう

「貴様如きが、ルルを『あんなの』呼ばわりとは……

私のこの程度のストレートをかわすこともできず、防ぐことも出来ないような奴が、ルルを下に見てるんじゃない

それと、貴様、ルルのことを『もやし男』と呼んだが、お前が1万人いようが、ルルの方が強いわ！！二度と私に話しかけるな、下衆が！」

そう言い放つと、男は明らかにルルに敵意を向けた

そして、そのままルルに殴りかかっていく

案の定、男はボコボコにされた

ルルは軽くあしらっていたつもりだろうが…

結構ダメージになってるからな……… かわいそうに

数日ダメージが体内に蓄積されているだろう

でかいの一発で済めば、意外と表面上のダメージだけだったかもし  
れないのになあ

くエヴァ Side ENDく

第1・5話〜第1話のちょっとした裏側〜（後書き）

エヴァ「短かったな」

K「ええ、それに第1話のちょっとしたエヴァ視点だったので1・5話にしたんです」

エヴァ「まあいい、それで私はもう帰っていいのだな？」

K「最後にそのカンペを読んでいたから、帰ってくださいね」

エヴァ「えーと…ご覧頂いた方がありがとうございます。第2話は本日月曜日中にアップ致します！」

## 第2話「夜ご飯のメニューに悩む少女」(前書き)

K「1・5話のアップから以外に早く2話の区切りつけたわ」

ルル「いや、その前に挨拶しろよw」

K「あ、こんばんは」

ルル「こんばんは」

K「8割型2話にかけてた状態で1・5話あげたから、早く2話目あげたよ」

ルル「よかったねえ」

K「うん、いいところで区切りつけたからね」

ルル「では、本編どうぞ」

## 第2話　夜ご飯のメニューに悩む少女

新年度初日から、試召戦争の戦線布告が、FクラスからDクラスになされた

下位クラスからの戦線布告は、拒否できない決まりがあるらしい

学園側もこれを許可

他のクラスは自習となった

試験召喚戦争か……

Dクラスが今日落とされ

明日明後日でBクラスがFクラスの手によって落とされる

明後日には、Fクラスの余計な策のせいで、Cクラスとの試召戦争があるんだっただか？

「…ルルーシュ・T・ランペルージ、ちょっといい？」

霧島さんが話しかけてくるのだが…

フルネームを一々呼ばれている気がする…ファーストネームで呼ぶのは失礼だと思っていて、尚且つファミリネームで呼ぶとエヴァともかぶるから、フルネームなのだろうか…？

「フルネームじゃなくて、ルルーシュでいいよ」

「…そう、じゃあルルーシュ」



「はい、なんでしょうが、霧島さん？」

「…FクラスとDクラスの試召戦争について…私達Aクラスはどうしたらいい？」

へ…？どうしたら？って…？

んー、確か原作でもFクラスとの対談の時、対応してたのは木下優子だったな

戦略立てたり、駆け引きしたりとか苦手なのか？

「何故、俺にそんなことを聞くの？」

「…次席だから、相談しやすいかなって……」

なるほどね……

「…一応、優子とも相談したんだけど、男子の意見も聞きたい」

「優子？」

「私よ、ルルーシュ君」

木下優子：Fクラスにそっくりな弟を持つ、美少女である

成績はいわずもがな優秀

だが、B L趣味を持ち、家ではかなりズボラで、学校ではネコかぶりな少女

「木下さんか：まあどう考えても、Dクラスを攻めた以上、上まで狙ってくると思うよ」

「なんでそういいきれなのよ？それよりもまず、FクラスがDクラスに勝てるわけじゃないじゃない」

「単に設備向上のみを狙うなら、Eクラスでしょ  
今の召喚獣に適応される点数は振り分け試験のもの、順当に考えて、初日に二つ上のDクラスに仕掛けるなんて、点数差でどうがんばっても負ける

聞いた話によると、単教科高得点者で450～500点代：点差で考えるなら5人で囲めば充分倒せると思うし、そんな逸材Fクラスにそこまで転がってるとも思えない

操作性が高い人がいても、点数低ければ、こちらもうまく対処すれば問題なし

ほら、Dクラスに攻め入る手札が足りないでしょ…」

「そうね、普通に考えて成績もあがるようなこともない、初日からFクラスがDクラスに攻めるなんてありえないわね

何故Dクラスに攻めて、何故ルルーシュ君は上まで狙ってくるなんていいきれるの？

その説明で、FクラスがDクラスに勝てると思えないんだけど…」

「Dクラスに攻めた理由、単純明快だよ…圧倒的な点数を持つダークホースがいるか、Fクラスの代表は、それなりに頭がきれる策士か、Dクラスの代表が策士として底レベルすぎると判断できる為かそこら辺かな？俺は、去年からいるわけじゃないから、他の生徒の事は詳しくないけど、去年上位にいたのに今年は見ない子とかいかな？」

普通に考えて、一年の時次席クラスの成績を持つ姫路の存在がいなことぐらい、Aクラスの連中ならわかるだろ

「…姫路瑞希」

「ああ！そういえば、見てないわね…」

「心当たりがあるのかな？」

「ええ、学年次席もしくは三位程度の成績を持つ、姫路さんっていう子がいるのだけど、彼女なんていうのかしら、か弱いというか病弱というか、すぐ体調を崩してしまうらしいの」

「本当に、Fにいるかは別として、難なく倒してくるんじゃないか

な？それと何故Fクラスが上、つまりAクラスまで来るか…

調子に乗って、Aクラスまで倒せるんじゃないかと言う考えにいたる人間、いるんじゃないかな？Dクラスを倒した時点で、二つも上のクラスを倒せたという自信に繋がり、士気のアップにも繋がるそして、この文月学園のシステム上、単教科高得点者が何名かいる可能性はあるし、ダークホースの存在の可能性もある

それに観察処分者という者もいると聞く、そこへ策士がいるのであれば、Aまで来るよ…戦争は純粋な力（点数）だけじゃないからね」

「観察処分者という言葉がでたのがびっくりだけど、それは何故？」

Aクラスって、勉強できても全然頭はきれない連中なのかな…？

「観察処分者、フィードバック…つまり、召喚獣との感覚リンク率が高い仕様がっている

召喚獣がダメージを受ければ、本体つまり肉体がダメージを受ける

それなら、ダメージを受けないように、操作性をあげるしかないだろう？

教師の雑用もされていると聞く、練習は充分施されてるんじゃないかな？」

「「なるほど」「」「…なるほど」

気づいたら、久保君と工藤さんも一緒に話を聞いていたようだ

「それじゃあ、Dクラス戦終了後、Fクラスが攻めてくるというのかい？」

「いや、Fクラスじゃあどうがんばっても、Aクラスには勝てないよ……」

久保君…君はいきなり参加してきて、いきなり質問を飛ばすのかい？  
まあいいか……

「「「え？」「」「…？」」

「霧島さん」

「…なに？」

「君にとっての弱点や、それになりそうなこととかあるんじゃないかな？」

それをFクラスの代表が、親しい者が知っている…それなら落とせる可能性があるかと踏むんじゃないかな？」

「……。」

何かを考えているのか、霧島さんは無言である

助け舟を出すかのように、工藤さんが声をあげる

「でもでも、弱点を知っているからなんなの？」

「一騎打ちに持ち込んだらどうする？」

「それで、代表の弱点をつくっていうの？」

「そうだね」

「そんなの飲まなければいいじゃない？」

確かに、このままなら飲まなくてもいいんだが

「そのために飲ませるように布石を打つ…」

「『『布石？』『』』」

「例えばだ…戦争でもしFクラスに負けて、設備入れ替えとなった…だが『設備は入れ替えなくていい、そのかわりにちよつとしたお願いを聞いてくれないか？』そう言われたら、どうする？」

「お願いにもよるけど…たぶん受けるわね」

「それで『Aクラスに試召戦争の意思があると思わせてほしい』も

しくは、『合図を出したらAクラスに宣戦布告し、試召戦争を仕掛けて欲しい』そういわれたら？」

「負けても、設備はワンランクダウンになるのね…それなら受けるとこだけど、Fクラスに負けているのなら、3ヶ月は宣戦布告できないはずよ？」

「表向きには、和平交渉による終戦ならば、問題ないんじゃないかな？設備入れ替えはしないわけだし」

「それで？」

「例えば、Dクラスと…そうだなCクラスかBクラスかなその2クラスと、そう言った取引を行う…そして、Aクラスとの交渉対談にて、それをちらつかせ、一騎打ちに持ち込もうとする

それならどうする？Aクラス、決して文武両道のような人選が揃っているわけでもない、体力的問題もある…

他のクラスとの連戦後、Fクラスに攻め込まれたら？確実に勝てる保証は？」

「なるほどね…理解できたわ」

「…説明ありがとう、ルルーシュ」

まったく、長々と無駄な話を・・・いつその事適当に流しておけばよかったか？

数時間後、Fクラス対Dクラスの試召戦争は、Fクラスに姫路さんが居て、Fクラスが勝利したものの、和平交渉にて終戦という話しが流れ始めた

「…ルルーシュの言ったとおりになった」

ツ・・・!!

ホント、気配もなく、足音もなく急に出てくるのやめてほしいわ…

俺でもびっくりするわ



「そうだね」

「…それで、Aクラスはどうしたらいいと思う?」

「んー、エヴァはどうしたらいいと思う?」

隣の席に座るエヴァに話しかける

先ほどはまったく話につっこんでこなかったので、声をかけてみた

「そんなことはどうでもいいんだ

今夜のメニューが決まらないんだが、ルルはハンバーグとトンカツどっちがいい?」

どうでもいいのねww

まだ夜ご飯のメニューに悩んでたんかいっ!

「そうだなー、トンカツかなあートンカツ、キャベツ、味噌汁、ご飯!これでいいでしょー」

「ん…そうか、わかった」

「……」

ジーツと無言で俺とエヴァの方を見ながら会話を聞いている霧島さんである

「ああ、ごめんごめん

そうだね、別に何かしたいなら案はあるけど、別に何もしなくてもFクラスに負ける事はないよ？現状ではFクラスに出来る事は限界があるからね

それにFクラスに負けた後の、少なからず弱体化したクラスに攻め入られるとしても、大した問題はないよ…まあフォローできるときはするから、ドンと構えてればいいよ」

「…わかった」

その日は、その後何事もなく終える事ができた

しいて言うなら、エヴァの作ったトンカツが最高だったことぐらいだろうか

サクサクうまぁ～ですね

翌日

午前中は穏やかに過ごすことができたのだが

午後からFクラスがBクラスに試召戦争をしかけるといっ…

「ルル、また今日も自習なのか？」

「FクラスがBクラスに試召戦争しかけたんだって」

「そうなのか、夜ご飯のメニューだが…今日は、蕎麦とうどん迷っているんだが、どっちがいい？」

また夜ご飯のメニューかww

「そつだなあ…天ざる蕎麦が俺が一番好きだよ」

「そうか！じゃあそれにしようっ」

うちのエヴァ、朝から夜ご飯のメニューばかり考えているんだけど…何故？ww

一番時間に余裕あつて、凝ったものが作れるからか？

さて、Fクラス対Bクラス戦は翌日に持ち越しとなった

Bクラス代表の小物君じゃなかった、根元君は卑怯やイカサマは手段のひとつという小悪党の鏡！

何かやらかしているようだが…

干渉はやめておこうか

その日はエヴァが張り切って、蕎麦を打つところからはじめて、夜ご飯の食べる時間が遅くなった程度しか特筆するようなことはないな

そうだな・・・他にあげるとするならば

俺はキスの天ぷらが好きだ！

キスっていう白身のお魚ね

天ぷらにすると美味いんだなあ、これが

ああ、こんな会話をエヴァとしたぞ

「それで、ルル…試召戦争だったか？どうするんだ？何かやるのか？」

「そうだねえ…Aクラス…Bクラス…Cクラス…Fクラス…どうしたもののかね」

「まあ私もあの設備から低くなるのは嫌だからな……」

「そうか……まあなるようになるさ」

「そつだな……」

朝日が昇れば、騒がしい二日間が始まるであろつ……

Cクラス戦…Fクラス戦…

## 第2話「夜ご飯のメニューに悩む少女」(後書き)

PVアクセス約3500 ユニークアクセス約750 お気に入り  
10件突破！

K「ありがとうございます！どんどん、お気に入り登録してやって  
ください！

評価や感想もお待ちしております」

ルル「ありがたいね」

K「ホントホント…欲を言うなら……ランキングに乗りたいた  
って思ったり」

ルル「ランキングね、一気に見てくれる人増えそうだもんね」

K「うんうん…ということで、どんどん見て、どんどん評価して、  
どんどん感想ください！お待ちしております!!」

末筆で申し訳在りませんが、ご覧いただきありがとうございます  
次回も早めにアップしたいと思います

第3話「TはTeaなんですよ、そう紅茶…」（前書き）

K「こんばんばん」

Eヴァ「こんばん・・・って何故また私がここに呼ばれた？」

K「今回出番ほばないから」

Eヴァ「なんだと？」

K「にらまれても...ふえないの！今回はルル、優子、友香回なの！」

Eヴァ「そ、そうか...まあルルが活躍しているなら・・・いいか・・・」

K「ということで本編どうぞ」



第3話「TはT e aなんですよ、そう紅茶…」

Fクラス対Bクラスの試召戦争二日目

教室につくと真っ先に、霧島さんの元へ向かう

「おはよう」

「…おはよう」

霧島さん今日も綺麗だねえ

ってそんなことを思ってる時じゃないな…

「ちょっと木下さん借りて、Cクラスに行っても良いかな？」

「…どうして私に聞くの？」

「試召戦争の火種になる可能性があるから、一応ね」

「……………気をつけて」

いつもより長い沈黙の後霧島さんは承諾してくれた

「ルル、私もついていくか？」

「いや、まったり座ってていいよ」

「そうか」

エヴァは俺の言葉に頷き、自分の席に座る

俺はそのまま木下さんの元へ

「おはよう木下さん」

「おはよう、ルルーシュ君

どうしたの？わざわざ挨拶しに近づいてくるなんて？」

少し驚いた表情をしている

「ちょっと俺につきあってくれないかな？」

「え？エヴァンジェリンさんも教室にいるのよ！？何考えてるのよ？／／／」

いや、お前が何を考えてるんだww

「Fクラスとの試召戦争に関わることだよ」

「え？ああ、そう。わかったわ」

木下さんを連れて、Cクラスに向かう

確か朝だったよな、Fクラスの秀吉女装作戦は……

Cクラス前まで来たが、今のところ気配は近くにないな

コンコンと軽くドアをノックして扉を開ける

「すみません」

「はい？」

1人の女生徒が反応し、こちらを向く

「Aクラスのルルーシュ・T・ランペルージといいます。Cクラスの代表さんに話があって来たのですが……」

「代表は私よ？」

対応してくれた人が代表だそうだ

「Cクラス代表の小山よ、それでAクラスの人がなんの用？」

「ただのご挨拶です、Aクラスの次席になつたのですが、今年転入してきました…一応顔ぐらい知っておいた方がよいかと思ひまして、こちらのクラスメイトである木下優子さんに案内していただいたのです」

「ああ、そう。」

「Aクラスの木下優子よ、よろしく。」

「ええ、小山友香よ、よろしく。」

ふむ、とりあえず何事もなく挨拶ができたね

「いやあ、うちの代表はキレイですが、小山さんはカワイイですね…」

「そう？お世辞ならいらないわよ」

「ああ、普通に可愛いと思いますよ、嫌いな人には嫌いって言うち

やうタイプなんで、お世辞とか言えないですね…例えば、Bクラス代表のド3流策士の小物とか……」

「あら、そのド3流策士の小物が、一応私の彼なのだけれど？」

小山さんがそう言った瞬間横にいる木下さんの表情が、こわばる…

「そうでしたか…知らずとはいえ、彼女さんに彼氏さんを蔑む言い方をしてしまいましたね…すみません。まあ本人が居ても直接言ってしまうでしょうから、大して意味はなさない謝罪ですけど、自分も大切な人を悪く言う奴がいたら怒っているでしょうからね……喧嘩をしにきたわけじゃないので、怒っていらっしやるなら、どうかそれを収めて欲しいのですが…」

「ま、まあ、別にいいわよ……あなた次席っていったわよね？」

よかった…案外彼氏の事に関しては、カツと怒るような人じゃないのかな？

「ええ。たまたま、『間違えているだろうけど！』と思った問題達が当たってたようで…本来ならAクラス上位程度で収まるはずだったんですけどね。それに姫路さんが、実力通りAクラスに居れば、次席なんて場所に納まってませんよ…ふふっ」

「たまたまでも凄いわね…」

「そうだ、小山さん…演技って興味ありますか？」

「演技？ええ、そうね…んー自分がやるのは得意ではないわよ…見  
てるほうが好きね

映画でもドラマでも舞台でも」

「見るのは好きですか、どうですか？今度是非、彼氏さんに内緒  
で舞台か映画でも…」

「嫌よ…なんで初対面のあなたとそんな約束しなきゃいけないのよ  
…」

「あはははっ、ですよー…ああ、そういえば、木下さんの弟さん  
って演劇部で優秀だとか？」

「え？ええ、そうみたいよ。なんか声真似？ができるみたいだし」

「へえ…声真似でもすごい人は声帯模写といってカンペキに声を似  
せることができるらしいですね……」

「それは凄いわね…そんな弟君は、何クラスなの？」

「さあ…演劇バカだからFクラスだったと思うわよ？」

「そう……」

「弟君って木下さんにそっくりなんでしたっけ？」

「ええ、そうね…」

「それなら、女性用の制服着て声真似なんかしたら、喋っていても気づかないかな……木下さん、ホントにお姉さんの方ですか!？」

「え? 当たり前でしょ!？」

若干、木下さんの怒りのボルテージがあがったようだ

「そ、そんなこと言つて、出会つて間もない自分なら、からかえると思つて入れ替わっているんじゃない?？」

「違うわよ!」

「じゃあ…そうですね…小山さん、木下さんがホントに弟さんの女装姿でないか、確認してもらえませんか? からかわれるのとか嫌なんですよ……まさかホントにお姉さんのほうだったら自分が確認するわけにいかないですし……」

「え? はあ…私はいいけど」

「ルルーシュ君、一体さつきからなんなのよ…まったく……まあいいわ

小山さんちよつと…」

木下さんは小山さんを隅へ連れて行き、制服の胸元を少し開いて、



胸があることを確認させたようだ

「ちゃんと女性だったわよ…まったく」

「私はちゃんとしたAクラスの木下優子よ…まったく」

女子2人から『まったく』と呆れ顔で見られてしまった

「あはははっ・・・いやーだって木下さんとは今日で会っの三回目ですし、弟君の方は会ったことないですし・・・そんなに似てるなら、見分けつけられないですよ……」

そうだ！合言葉決めましょうしたら、わかるでしょう？。」

「はあ…そうね…もうなんでもいいわ」

「ねえ、木下さん、このルルーシュ君ってこんな自由な子なの？」

「え？んー結構自由かもしれないわね」

え？そう思われてたの??

「じゃあ、そうですね、小山さんにも特別に自分のミドルネームのTがどういう言葉のTか教えますねそれを知っているのは、ほんの一握りの人間しかいませんから、合言葉になりますから」

「ええ、それでいいわよ」

「そうね…確かにTの意味が気になっていたけど…」

木下さんはミドルネームのTの意味を気になってくれていたようだ

「紅茶の英語表記のT e aのTですよ、飲み物の中で紅茶が好きです」

「え？そんな理由でそのミドルネームなの！？」

「というより、ミドルネームもフル表記しても、発音はティーのままなんだ…クスクスッ」

上が木下さん、下が小山さんのリアクションである

「はい、あ、結構長いしちゃいましたね、そろそろ失礼しましょう。木下さん」

「そうね。」

「では、小山さんまたお話ししょう」

「ええ。くだらない話しもあつたけど、たまにはいいわよ」

俺は、立ち去る前に、小山さんにこつそり声をかける

「もし、木下さんと思われる人が今日中にきたら、相手の話に乗ったふりをしてください。そして、Aクラスの自分のところへ報告にきてください。できれば構いません」

「お願いします。」

それだけ言い残して、その場をさる

俺と木下さんは、小山さんと接触することができたし

弟の話もした

そして、念のための確認するための合言葉も伝えた

もし最後の言葉どおりに動いてくれなくとも、女装した秀吉がきて確認をとれば、Aにはせめてこないだろう

Aクラスに戻り、霧島さんに、あとはFとCの出方次第とだけ伝え席に戻る

「ルル、大丈夫だったか？」

「転ぶ方向は二択、Cクラス代表が、Fクラスに怒りを覚えるか…Cクラス代表がこちらに敵意がない状態でここにくるか…まあこち

らに敵意を持ってきた場合は、ああ残念っていうだけだろう」

暫くすると、Cクラス代表の小山さんが数名をつれて、Aクラスに乗り込んできた

「Cクラス代表の小山よ！木下優子を今すぐ呼びなさい！！」

怒鳴ってるねえ……

Aクラス内が騒然となるなか、木下さんとそれに続くように霧島さんが向かう

「何かしら？」

「さつきはよくも散々な事を言ってくれたわね！…とりたいところだけど、ルルーシュ君も呼んでくれるかしら？」

ほう……乗せられているふりをして、ここまで来たか

「さつきぶりですね、小山さん」

「ええ、あなたが最後に残していった言葉の意味、それからやけに意図的に何かを伝えようとしていた会話から、あのクズクラスの奴が来ても気づくことができたわ

まあ、一応言われた通り、乗せられたふりはしたけど…？」

「え？なんなの？」

「一応確認なのだけどあなた、木下優子さんでいいのよね？」

「え？ええ。」

「そう、あなた紅茶は好き？」

小山さんの質問に朝のやり取りが一瞬あたまをよぎったのか、ほんの少し間が空いてから木下さんは答えた

「そうね、T e a はよく飲むわよ」

数秒小山さんと木下さんの目が会う

「本物ね…さつきFクラスのあなたの弟が、あなたのふりをしてCクラスに乗り込んできて、散々罵倒して行ってくれたわよ」

「なっ！そうだったの？愚弟がひどい事を言っでごめんなさい…」

「いいえ、別にいいのよ

ルルーシュ君の働きがなければ、Aクラスの木下さんに言われたと勘違いして、何も考えずにAクラスに試召戦争をしかけることになりそうだったから…」

「え？もしかして、今朝ルルーシュ君とCクラスに行ったのってまさか……？」

小山さんと木下さんの視線がこちらに移り、それと同時に周囲の視線も移る

すごく注目浴びてるんですけど…

「初めから小山さんがCクラス代表なのは知っていたし、わざわざ木下さんを連れて行って、脈絡もない自由な話したのは、これの為だよ…まあ小山さんがうまく俺の言ったとおりになってくれたからこそ、穏便に話しを進められるんだけどね」

「それで、この通り乗せられたフリして、ここまで来たけど、どうしたらいいのかしら？」

「霧島さん、試召戦争に関わるコトです  
代表としてあなたも挨拶してください」

「…Aクラス代表霧島翔子」

「あなたが…私はCクラス代表の小山友香よ」

ひとまず、対談の場を儲け席につく



「さて、先に俺の目的から話しましょうか…

簡単ですよ、Fクラス代表の思い通りに学年全体が引つ掻き回されるのが気に喰わないだけです。だからこちらに飛んでくる火種を、意図的に潰したかったにすぎません。

本来であれば、たぶん今頃Aクラス対Cクラスの試召戦争で互いのクラスが準備を行っている頃でしょうから」

「それで、Cクラスに何を求めるの？」

「単純明快、Fクラスの思惑に乗ったと見せかけて、Aクラスに戦線布告していただきます」

「「え？」」「…？」

話を聞いていたAクラス連中がザワつく

「そして、Aクラスの召喚獣の操作スキルをあげる為の練習台になつていただきたい」

「練習台？」

「ええ、そして、最終的にはCクラスの負けという形で終わっていただきます」

「ちょっと待ちなさいよ、それじゃあCクラスの設備が下がってしまっただけじゃない？」

「和平交渉で終わらせるんですよ、Cクラスの設備を下げたところでメリットはない」

だが、しかし、勝敗が決まりそうにないから和平交渉にしたんだろっ？と思われて、Aクラスに攻めるバカ連中が増えても困りますなので、一度最終的に小山さんには討ち取られていただき、和平交渉でその他リスクは失くすと……」

「口約束で、そんなこと受け入れられないわ」

「そうですね、では…仕方ない、帰っていただいても構いませんよ」

「な……どうゆうことよ!？」

「いえ、だから、何事もなく教室へおかえりいただいて結構ですあくまで今回Cクラスとの接触は、戦争回避か友好関係を築いた上での召喚獣の練習相手、どちらかになれば問題はないのですから…小山さん自身、冷静に考えれば、今の新学年始まったばかりでの試召戦争でAクラスに勝てる手段がないことぐらい、理解できてるはずです」

友好関係が築けなくても、無駄に宣戦布告するなんて愚の骨頂なまねしないでしょっから」

「確かにそうね……わかったわ、あなたを信じましょう  
実際事前に種をまいて置いてくれたおかげで、無駄に戦争を起こして設備を下げる結果に至ってないのだから」

「はい、ではそれでいきましょう。ただCクラスにメリットがないですね」

「いえ、事前に情報を与えてくれたおかげで、こちらが散々な目にあってないことでも充分だわ。それにFクラスの手のひらで踊らされるような真似には、なっていないわけだし」

Cクラスの皆にはつたえておくわ、それに私達としても召喚獣の操作性をあげるために実戦は必要だもの」

「そう、じゃあそれでいいかな？霧島さん？」

「…私は構わない」

「じゃあ交渉成立ね、ではCクラスはAクラスに試召戦争の宣戦布告をするわ」

交渉成立かに思えたとき、Aクラスの生徒から声があがる

「ちょっと待てよ、何故わざわざ試召戦争をする必要があるんだ？」

明らかに不満を意する、口調であった

「あーそうだな、Aクラスの人の中には、こう思っている人もいるのではないか？『点数高いから大丈夫』『俺達はAクラスだぜ？』『どのクラスに攻められても点数高いから負けるわけがない』」

甘いよ、布石を積み、策があり、操作性が高ければ、点数が低く

ても

Aクラスは討ち取れる

いいか、テストの問題の正解は一択とは限らない……それと同じで、試召戦争も点数一択で勝ち取れるとは限らないんだよ  
頭がいいと自負するなら、そのぐらいわかってくれ  
その点数の自信だけでは、足元をすくわれるぞ」

そう俺は言い放ち、Aクラス連中を見渡す

「何かいいたいことがある奴はいなさそうだな……  
では、改めて、小山さん……」

「ええ、CクラスはAクラスに宣戦布告します」

「……わかった」

こうして、Aクラス対Cクラスの試召戦争の舞台が整ったのである

第3話「TはTeaなんですよ、そう紅茶…」（後書き）

K「はい、ということでしたでしょうか、第3話  
ご都合主義全開の交渉回となりました」

Eヴァ「うー何故私を、交渉の席に呼ばないんだ!」

K「いや、Eヴァって、交渉ごとで下手に出るようなキャラじゃないじゃん」

Eヴァ「く……そのぐらい設定を変えろ!変えるんだ!」

K「そのメタ発言はやバイと思うよ……w」

Eヴァ「まあ仕方ない、もっと私の出番を増やせ!いいか、ルルと私の絡みをもっとだ!」

K「機会があればね…とまあEヴァの相手はこのへんで終わりにして…」

PVアクセス5600突破 ユニークアクセス1000突破 お気に入り件数13件 文章・ストーリー評価0件 感想等0件

ありがとうございます!

評価と感想がないのは痛いのですが…

まあ評価は始まったばかりでつけられないとか…わかるのですが

感想が一切こないのは何故なんだあああああ！?!?!?!

という疑問を抱いております

よかったら、感想等お待ちしております！

ご覧頂きありがとうございます

第3・5話とある少年は観察処分者（前書き）

K「こんばんわん」

ルル「こんばん…って今回俺出てないのに呼んだの？」

K「はい…他に呼ぶ人いなかった」

ルル「ぼっちなんですね作者さんww」

K「ええ、ぼっちですとも!」

ルル「胸をはって言うことじゃないから!」

本編どうぞ

### 第3・5話とある少年は観察処分者

とある少年は、振り分け試験の時に

熱で倒れてしまった、姫路瑞希というピンク髪のきよきよきよ  
巨乳少女を、保健室に連れて行くために

途中退室してしまう

ここ文月学園は、いかなる理由があろうとも

試験での途中退室は、0点扱いになる

そう彼は0点になってしまったのである

勿論、熱を出して保健室に行った少女も同じく



少女は学年で次席クラスの高点数を叩きだせるほど頭がいい

だが、文月学園は、本番で出せない力は認められない

とても残念であるが、これもまた仕方がないこと

少年はそんなルールに激しく対抗した

だが、一生徒にそのルールを覆すことが出来る

策も、力も、閃きも

なかったのである

少年は、試験を受けようが受けまいが、最下位クラスへ入るのは必然だったであろう

ランダムで回答し、たまたま当たりが多ければ

最下位よりワンランク上のクラスに行けるであろう程度

彼が試験を放り出し、倒れた少女を、保健室に連れて行くこと

彼の性格的に必然で起きたコトである

新年度、少年は

見慣れた顔が並ぶ教室へと踏み込んだ

一部腐っていると思われる畳

ヒビが入った壁

一部が割れた窓ガラス

簡単に壊れてしまうような卓袱台

綿が消失したただの布同然になった座布団

最下位クラスとはとてもひどい環境であった

だが、文月学園でのルールでは仕方がないこと

その最下位クラス、つまりFクラス代表はゴリラではなく

長身でそこそこ体格も大きい

そして赤髪のツンツンヘアー

過去に神童と呼ばれ、中学時代は不良達の間で有名であつたらしい

坂本雄二

一年生の時から知り合いだった

他には、カメラを片手に持つムツツリーニと呼ばれる

土屋康太

彼は保健体育の点数が、教師レベルであると評価されているが、他の教科は・・・

Fクラスにいるのだから、壊滅的だと判断するのは簡単である

ポニーテールが特徴で、スレンダーな美少女

島田美波

ドイツからの帰国子女で日本にきてまだ一年ほど…

そのため漢字の読み書きが苦手である

上記の理由から、問題文を読み取ることができず

試験での点数は伸びていない

計算するだけの問題がある、数学はBクラス程度の成績を収めている

一見クラスを見渡すと、もう1人美少女がいるように見えるが

生物学上しっかりと男性とされている

木下秀吉

Aクラスに木下優子という女生徒がいるが、彼女の双子の弟がこの秀吉である

演劇一筋の演劇バカで、勉強の方は壊滅的

そしてそんな中現れたのは、姫路瑞希

文月学園のルールに乗っ取り、本来Aクラスにいるであろう彼女は

Fクラス入りを果たしてしまった

さて、この少年…彼女の姿を見て思う

『姫路さんみたいな、体の弱い女の子が勉強するような環境じゃない』

その少年は、坂本雄二に相談する

「雄二、試召戦争をやってみない？」

相談を受けた坂本雄二は答える

「俺もそう思っていたところだ」

坂本雄二にうまく乗せられた、Fクラスの生徒達は

まずDクラスに宣戦布告し、勝利を収める

そして、次のターゲットはBクラスに

Bクラス代表、根元恭司

彼は目的のために手段を選ばない男であり

Fクラス戦でもそうであった

Fクラスとの交渉の席を設ける間に、Fクラスの教室を荒らした



Fクラスは、根元の策にひっかかり、教室荒らしを許してしまった

その後、CクラスがFクラスを狙っていると思われる情報により

根元の策にひっかかってしまう

翌日：Cクラスの使用を危険視した、坂本雄二はAクラスの木下優子にそっくりな、木下秀吉を使い

Cクラスの予先を、Aクラスに向ける打開策を打つ

既に、Aクラスの手が回った後とも知らずに

秀吉に優子の演技をさせ、Cクラスに乗り込ませる

「豚臭いわ！話しかけないでちょうだいっ」

あまりに酷い罵倒である

ただ一つ、Cクラス代表が発した意味不明な一言が、少しばかり気になった坂本雄二…

「木下優子！紅茶の美味しさも知らないような味覚馬鹿には、二度とそんなこと言わせないようにしてあげるわ！！」

ただ単に相手を怒らせたかったから言った言葉だろうか……

まあ気にするようなことでもないかと、坂本は作戦が成功したと捉え、対Bクラス戦へ思考を向ける

Bクラス戦二日目がついに始まった

Fクラスのそのとある少年は、姫路の動きがおかしいことに気づく

その視線の先には、ニヤニヤと笑みを浮かべながら、ラブレターを手に持つ根元であった

そのラブレターに少年は、見覚えがあった

『姫路さんが書いてたものだ…』

たまたま書いているところに出くわしてしまっていたので、少年はそれが姫路が書いていたラブレターだと気が付いた

どうやら姫路さんを脅して、動きづらくしているようだ

少年は姫路さんに体調が優れないようだから、さがるように伝え

Fクラスの策士である、坂本雄二の下へ走る

「雄二、お願いがあるんだ  
根元君の制服がほしい」

それと姫路さんを前線から外して欲しい」

馬鹿発言を交えつつ、坂本に頼む

「姫路がやる予定だった仕事をやれ」

「どうやって？」

「自分で考えろ、お前にしか出来ないやり方もあるだろうっ？」

坂本の言葉に少年はひらめいた

少年は、吉井明久

肩書きがある

観察処分者

バカの代名詞である

観察処分者の召喚獣は、物に触れることができる

普通は出来ないのだが、教師の雑用などもやらされるためだ…

そして、召喚獣は普通の人間よりも力がある

吉井はそのバカとしか言いようがない頭で考えある事を思いつく

やるべき事は、根元の周りにいる近衛部隊をひきつけること

吉井は覚悟を決め、何故かBクラスの隣の空き教室で偽りの模擬戦を開始する

目標は、壁をブチ破り、Bクラスに突入し近衛部隊をひきつけること

召喚獣の拳が壁に突き刺さるたびに、吉井の拳に痛みが走る

観察処分者のデメリット…フィードバック

召喚獣が受けたダメージが、吉井本人にも伝わるといふモノ

手から血が流れようと止める事はしない

何よりも、根元が許せなかった

何よりも、根元だけには負けられない

その信念の元……壁を殴って殴って殴り続けた

坂本の合図と共に、渾身の一撃が壁に……

吉井の作戦は成功、壁をブチ破り、近衛部隊をこちらに引き寄せる

空いて居た窓から、土屋と担当の先生が舞い降り

根元を討ち取る



FクラスがBクラスに勝利した瞬間であった

### 第3・5話とある少年は観察処分者（後書き）

PVアクセス7900突破 ユニークアクセス1300突破 お気に入り登録17件 感想1件

大変ありがとうございます！

初の感想いただきました！！

更新頑張ってくださいと応援いただきました（\*、\*）

ゼロ様また是非、感想等いただければと思います

K「ということで、今回の3・5話なのですが、軽くFクラス側にも触れておこうと書いたのですが、後半眠い中書いていてかなり雑になっている可能性が・・・すみません」

ルル「」での発言が少なくてびっくりしたかも」

K「ええ、一応原作を知っていらっしゃる方が、頭の中でBクラス戦終了までの回想を頭に流した後に、第4話に入っていたかどうかと思ひましてね」

ル「なるほどね…ホント原作知らない人には優しくないよねww」

K「まあ、それは偉大なる原作を買っていただいて、お読みくださ  
いという宣伝効果を！」

ル「いや、絶対深く考えないで書いてただろ？ww」

K「あはははははは………」

「ご覧いただきありがとうございました！」

第4話（前編）〜一騎打ち？いいよ？でも、それじゃあつまらないから前哨戦を

K「ばんばんばんばんこんばんばん」

ルル「やけにテンション高いな」

K「PV9400突破！ユニーク1400突破！お気に入り登録21件！だよ？」

お気に入り件数もつと伸びてくれると嬉しいなあって思ったり

「

ルル「そうだね…それより今回の話しは？」

K「ああ、そうでした。ちょっとggdgd感が否めないのですが、  
温かい目でご覧ください！」

第4話（前編）〜一騎打ち？いいよ？でも、それじゃあつまらないから前哨戦を

Fクラス対Bクラス戦二日目が行われた裏で、Fクラスの策略により

Aクラス対Cクラス戦が行われた

Fクラス代表の坂本雄二はそう思っていた

だが、ルルーシュの働きと、Cクラス代表小山がした選択により

一見Aクラス対Cクラス戦が行われているに見えるその戦場は、とても落ち着いた状態であった

FクラスやBクラスは自分達の争い事で、こちらを気にしている暇はない

そうこの俺ルルーシュ・T・ランペルージにとって必要だったのは、  
AクラスがCクラスと試召戦争を行ったという事実だけだ

中身に熱がなくても問題はない

1対1の戦いがいたるところで行われている

中には、1対3や

逆に3対1での戦闘を想定して、練習が行われている

一応試召戦争であることから、想像以上のダメージで0点になってしまう生徒も数名居たものの

AクラスとCクラスの空気間は至って良好そのもの

暫くの戦闘で、少しは操作性を覚られたのではないかと思う

開始から2、3時間がたったころ、Cクラス代表が近づいてくる

「そろそろいいかしら？」

「そうだね、木下さん小山さんの召喚獣を…」

「ええ、ではごめんなさい。小山さん」

木下さんの召喚獣の手により、小山さんは敗北

代表が討ち取られたことにより、Aクラスの勝利がきまった

その後、手筈どおりに和平交渉にて終戦となった

ちゃんと回復試験を受けつつ行ったので、最後に討ち取られた小山さん以外は、実質的な点数ダメージは低い

その日の放課後まで話は飛ぶ

俺はエヴァと共に、家路についていた

「ルル」



「どうした？エヴァ」

「召喚獣というのは凄いな…確かに私達をイメージして作られていた」

「そうだね」

召喚者の趣向や素顔を映し出すがよかったのか…エヴァは特にエヴァ！って感じがしたな

「腕輪の効果は確認してないがよかったのか？」

「俺は確認したよ？」

「え？なんだと？そんなこと聞いてないぞ？」

だって、言っていないもの…ww

「一部教科だけね」

「総合教科は？」

「試してないね…というより、当初の予定では4000点以上にすらつもらなかったし  
いないよ」

「そうだな」

翌日

遅刻した

ちょっとだけね？ちょっとだけ

教室に着くと、何やら騒がしい

「FクラスはAクラスに代表者による一騎打ちを申し込む」

どうやらFクラスが対談をしに来ているようだ

俺とエヴァは無視して席につく

「ちょっと待ちなさい、私だけじゃ判断できないわ」

この声は木下さんが、霧島さんじゃなくて木下さんが対応してるのね

「ルルーシュ君！遅かったじゃない！！こっち来て」

登校してきた俺を発見した木下さんが、大声で名前を呼ぶ

ふむ…Fクラス交渉か

「はいはい、お呼びでしょうかお姫様」

とおふざけで、方膝を付いて、手を胸にあて木下さんに言ってみる

「お、お姫様…じゃない、Fクラスが試召戦争の交渉にきてるのよ」

「ほー、そして俺にどうしろと?」

「いや、こつゆつの得意そうじゃない?」

やれやれと言った表情を、全面的に俺は木下さんにぶつけて、対談の場へ足を踏み入れる

偉そうにFクラス代表の坂本雄二が座っているのが目に入る

その対面にある席に俺はドカツと座る

「それで、このAクラスじゃない見ない奴らがFクラスなの？」

「Fクラス代表坂本雄二だ」

あー野生風味溢れる感じだね

「ルルーシュ・T・ランペルージ…代表じゃないけど、一応Aクラス所属だよ

それで、何の用かな？」

「Fクラスは試召戦争の宣戦布告をAクラスにしたいのだが、勉強などで忙しいだろう？Fクラスのバカ連中のように体力ありあまるような人たちでもないだろうしなAクラスの連中は…

だから代表の一騎打ちを申し込みたい」

「一騎打ちね、条件次第で受けてもいいよ」

「ッ！」

いや、あんたが驚くなよ…自分で持ちかけたんじゃない

「ちょ、ちょっと！ルルーシュ君？一騎打ちなんてそんな…」

「そんなことを提案してくるぐらいだから、何か策があるのではないかとでも思っているのか木下さん」

「え、ええそうね…実際DクラスBクラスと倒してきたのは事実だし」

確かに、圧倒的な点差を埋められるほどの策を練れる男

何か対Aクラス用のコトを用意していてもおかしくない

「と一騎打ちでもいいのだけど、それじゃあ盛り上がらないじゃないか  
いか

ということ、試召戦争の結果は代表同士の勝負に委ねるとして  
その前哨戦ということで、数名代表をだして手合わせしないかい？  
昨日Cクラスの人たちと戦ったのだけど、操作のコツがイマイチ  
つかめなくてね…経験つめるならしたいのだよ」

「ん？その前哨戦とやらの勝敗は、クラス間の勝敗には関係ないって  
いうことか？」

「そうそう、クラス間の試召戦争の勝敗は、完全に代表同士の戦い  
一戦にのみ適応だな」

「まあ、全く関係がないのなら、俺は構わないが…」

「そうか、でもただ、前哨戦でなんにもなく戦うんじゃないな  
負けた方が勝った方の言う事をひとつ聞いてもらうっていうのを  
つけたら、代表戦前も盛り上がるんじゃないかな？」

「いいだろう、何人出せばいい？」

「そうだな…代表戦とは別に5人でどうだい？代表戦のカードは霧  
島さん対坂本君で」

「それでいい…対戦科目の決定権はもらっていいか？」

「前哨戦のうち三つはもらうよ？」

「ああ。」

「では確認だ、前哨戦…つまりクラス同士の勝敗に関係する戦いで  
はなく、互いの代表を応援するという意味での戦いを5戦した後、  
霧島さん対坂本君の代表戦を行う

そして、負けた方は勝った方のいう事を一つ聞く…もちろん出来  
る範囲でのことだけに限る

科目選択の決定権は、Aクラスに前哨戦3試合分、Fクラスに前  
哨戦2試合分と代表戦の1試合分

これでいいかな？」

「大丈夫だ」

Fクラスとの交渉が終わり、一時Fクラスは撤退

クラス全員を連れて、後ほど来るといふ

「……ルルーシュ、どうして私と雄二の代表戦のみ、クラス間の勝敗に左右するなんてしたの？」

「霧島さんと坂本君は、幼馴染だね？」

「……（コクッ）」

霧島さんは頷く

「そうだな、彼は君の弱点……もしくは確実に間違える問題を知っているのではないかな」

科目選択の決定権の代表戦の分を彼にあげたのは、あえてその策を行わせるため」



「…それだと、私が負けるんじゃない？」

「いや、君は勝つよ」

そんなんで負けるなら…君を信じた俺がバカであつたというだけだ  
俺達は君が勝つことを信じ、前哨戦で勝利というエールを君に送る  
ただそれだけの話し、君は全力で坂本雄二を倒せばいい」

「…わかった」

後半へ続く……

第4話（前編）～一騎打ち？いいよ？でも、それじゃあつまらないから前哨戦を

K「ご覧頂きありがとうございます！」

ルル「なんか無駄に前哨戦なんてつけたのね」

K「そうそう、それで今だから言えるのだけど

バカテスの原作1巻と2巻友達に貸したままで、うる覚えって  
いうね…ww」

ルル「あうとおおおおおお！すぐに返してもらうのだ！」

K「いや、それがさ…一年以上返ってこないんだよ…借りパクされ  
たば……」

ルル「それは残念ですね……」

K「とまあここで次回予告！」

描写が省かれすぎて、存在する意味がわからなくなった前哨戦  
ルルとエヴァの召喚獣は一体どんなものに！？

次回、俺と俺の嫁と召喚獣<sup>エヴァ</sup>だと？（仮タイトル）

第4話（後編）～霧島さんの発言が原作と違う…まさかの霧島フラ  
グ建設！??

本日22:00にアップ予定

第4話（後編）　霧島さんの発言が原作と違う…まさかの霧島フラグ建設！？

K「はい、ということで始めての予約投稿？」

ルル「うまく投稿できるといいね」

K「では、ついに始まりますAクラス対Fクラス戦！」

本編どうぞ

第4話（後編）　霧島さんの発言が原作と違う…まさかの霧島フラグ建設！？

Fクラス対Aクラスの舞台が整えられた

「ではこれよりAクラス対Fクラスの試召戦争代表戦を行います  
まず前哨戦ということで、一騎打ちの5連戦を行います  
これはクラス間の勝敗には影響が出ません

では、まず一戦目、両クラス出場者は前に」

司会進行判定は、学年主任の高橋女史である

「Fクラスからは、木下秀吉をだす！」

坂本君の言葉により、秀吉が前に出てくる

「Aクラスからは、木下優子」

何故、俺が代表みたいな役割をしなければならないんだ！！

前哨戦 一回戦

木下優子 対 木下秀吉

「教科は好きなモノを選んでいいわよ、秀吉」

「日本史でいいかの？」

「ああ、その前に、秀吉ちょっといいかしら？」

木下さんは秀吉を腕を掴み廊下に引きずり出す

Cクラスへの罵倒の件の制裁を行っ たらしい

前哨戦 一回戦 日本史

WIN 木下優子 対 木下秀吉 南無阿弥陀仏

画面の表記がおかしいことになっているが、気にしてられない

「では、前哨戦二回戦、両クラス出場者前へ」

Fクラスからは島田美波が出るようだ

「エヴァ、行つて来い」

「私がいくのか!？」

「エヴァちゃんの活躍するカワイイ姿みたいんだけど?」

「む…ルルがそう言うなら…../../」

エヴァちゃんがちょっと嫌々ながらも人前に出て行く

「教科はくれてやる!」

「そつ、なら数学を」

前哨戦 二回戦 数学

エヴァンジェリン・A・K・ランペルージ 対 島田美波



「では、初めてください!」

「「サモン!」」

島田美波を小さくし、何やら西洋の軍人のお偉いさんが着ているような正装に身を包み

サーベルを片手にもつ召喚獣が現れた

頭の上には202という数字が浮かんでいた

髪型は召喚者と同じくポニーテールにしっかりなっており

ぬいぐるみのようなものである

一方エヴァの召喚獣だが、召喚魔法陣の上に黒い霧というか煙りのようなものが、数秒現れた後……一向に姿が見えない

「え？どうゆうことよ？あなたの召喚獣出てないじゃない？」

島田さんは完全に油断をしていた

エヴァがニヤッと口元を緩めると

島田さんの召喚獣の影から、ぬつと腕が出てきた

その腕の先には、ビームサーベルのような武器

背後から島田さんの召喚獣は、首を狩られて戦死した

「え？な、何が起きたの！？」

「すまないな、召喚してすぐに腕輪の能力を発動させてもらった  
まあ想定外な能力に驚いたが、楽に狩らせてもらったよ」

「腕輪持ち!？」

前哨戦 二回戦

エヴァンジェリン・A・K・ランペルージ 対 島田美波

数学 530点 対 0点

島田さんの召喚獣が消えると、エヴァの召喚獣がやっと姿を現した

エヴァを小さくした姿ではあるのだが、召喚者事態が小さかったか  
らか

他の召喚獣よりも一回り小さい気がする

服装は、文月学園の制服と至って普通なのだが…片手にビームサーベルのように手から剣の形をした微発光物質が出ている

ネギまの原作がわかる方は、断罪の剣を想像していただければたやすいであろう

「腕輪の能力で、発動と同時にお前の召喚獣の影の中に潜伏させてもらったよ」

エヴァの数学の腕輪の能力、影の中に入れる…というのは能力で出来る一部にすぎない

正確には影操作能力である

エヴァは召喚と同時に腕輪を発動した、すると黒い霧のようなものが発生

影をどう操るか、エヴァ自信の中で決めて居なかったため、周囲の影がエヴァの召喚獣を包んだだけとなった

それを一目見て能力を判断したエヴァはすぐさま、影から影に移る

影転移を使用し島田さんの召喚獣の影に潜んだ

そして油断しているところを断罪の剣でしとめたのである

前哨戦 三回戦

Fクラスは吉井明久を投入

彼は観察処分者である

観察処分者の詳しい説明は、勝手ながら省かせてもらう

「Aクラスからは、久保利光！」

Fクラスの生徒は、去年の成績的に姫路さんがFクラスにいる今、学年次席は久保君だと思っている

そのためか、辺りが少々ザワつく

前哨戦 三回戦 総合教科

久保利光 対 吉井明久

3998点 768点

観察処分者の吉井明久は、数倍の点差などものともせずひっくり返すほどの

召喚獣の操作スキルが高い

がしかし、負けてしまうものは仕方がない

前哨戦 三回戦 総合教科

久保利光 対 吉井明久

2698点 0点

充分善戦をしたと思われるが、久保君の攻撃を懸命に回避するもの

の、度々被弾し

吉井君のダメージが低い攻撃の連打では、点数をひっくり返すのに限界があり

泥仕合化した為、描写には触れないでおく

前哨戦 四回戦

「……俺が出る」

ムツツリーニと呼ばれる少年

本名土屋康太

保健体育の点数だけ異常に高い



「じゃあ、ボクが」

前哨戦 四回戦 保健体育

工藤愛子 対 土屋康太

445点

589点

工藤さんが腕輪の能力である、加速を発動し勝ったかに見えたが

土屋君も腕輪持ちで、工藤さんと同じ加速の能力であった

工藤さんの腕輪持ちであるという自信から、油断が生まれ

土屋君に一刀両断されてしまう

前哨戦 五回戦

「私が行きます」

そう言って出てきたのは、姫路瑞希

「ならば、俺が出よう」

前哨戦 五回戦

ルルーシュ・T・ランペルージ 対 姫路瑞希

「仕方がない、特別に俺が決めるはずの教科選択を、君に選ばせてあげよう」

「いいんですか？」

「ああ。」

「では、総合教科をお願いします」

「それでは、はじめてください！」

「「サモン！」」

姫路さんを小さくした見た目の召喚獣が現れる

がっしりと鎧に包まれ、手にはランスだろうか？リーチが長めの武器が見える

そして召喚獣の左手には腕輪が

頭の上には4418の数字が浮かぶ

4418点か……

そして俺の召喚獣は、同じく自分を小さくした見た目で

服装は文月学園の制服である

武器は刀が2本腰に手に木刀一本である

「昨日Cクラス戦の時に回復試験を受けてね…」

前哨戦 五回戦 総合教科

ルルーシュ・T・ランペルージ 対 姫路瑞希

5720点 4418点

「結構がんばっちゃったよ」

その言葉と同時に、俺は切り込む

姫路さんはそれをランスで受け止める

かなりランスが硬いと見受けられる

それに身を包む甲冑

装備の差が酷い気がするな

木刀を姫路さんに向けて投げる

その後を追う様に、姫路さんへ突撃する

刀の一本を掴む

姫路さんは投げられた木刀を、ランスで切り払うように防ぐ

## 居合い斬岩剣

居合いの要領で斬岩剣を姫路さんに浴びせる

俺の召喚獣は、何故か気と良く似た効果を生じることができるらしい

追撃するかのごとく、姫路さんへ斬空閃を連発する

斬空閃 気を斬撃に乗せて放つ技

斬空閃を出しすぎたせいで、爆煙が上がり

姫路さんを見失ってしまった

突然ランスを向けて煙りの中から飛び出してきた姫路さんの攻撃により、抜いていた刀が吹っ飛ばされてしまう

さて、無双のお時間だぜ？

姫路さんの周囲を飛び回りながら、居合い拳を放ち続ける

高い威力で吹っ飛ばされることもなく、倒れそうになるとも四方八方からの居合い拳によりそれは許されない

ランスを振り回すものの、居合い拳の方が射程距離は長い

とどめに居合い拳を喉へあて、姫路さんは吹っ飛ぶ

前哨戦 五回戦 総合教科

ルルーシュ・T・ランペルージ 対 姫路瑞希  
5673点 0点

前哨戦

WIN 木下優子 対 木下秀吉

WIN エヴァンジェリン・A・K・ランペルージ 対 島田美波

WIN 久保利光 対 吉井明久

工藤愛子 対 土屋康太 WIN



WIN ルルーシュ・T・ランペルージ 対 姫路瑞希

前哨戦は4勝とAクラス圧倒的に勝った

Fクラスからは負のオーラが漂う

前哨戦とはいえ、4敗してしまったのだ

何か策があつたとしても、それが本当に通じるのかと心配になってしまうであろう

「では、前哨戦終了ということで、代表同士による、一騎打ちを始めたと思います」

「教科選択は事前の交渉どおり、俺がもらうぜ  
日本史小学生レベルの問題で上限100点満点の筆記試験を頼みたい」

坂本君の言葉により、問題が用意され代表2人は別室に

残された、生徒達には、どんな問題が出題されているか、モニターでみれるようになっていた

それをFクラス連中は注目しており、突然歓喜の声をあげた

大化の改新は何年に起きたかという問題か…

原作を見て居る方はわかると思う

それは、間違えた答えを小さい時に、坂本君が霧島さんに教えたことだ

それを霧島さんは大事にして、本当の答えがわかっていても間違え

を書く

そう坂本君は踏んでいた

「やった！これで俺達がシステムデスクだ！」

霧島翔子 100点 坂本雄二 53点

だが、現実はきびしかった…

霧島さんがノーマスというのにもちよつと、驚いたが

坂本君53点って……使われていない知識が数年たつても頭に残っているなんて、甘いよ……復習も何もしなかったのだらう

戻ってきた坂本君は、Fクラスのメンバーに縛りあげられて文句を言われていた

「……ルルーシュ」

「はい？」

またか……またその隠密性を駆使して、俺に話しかけて

俺を驚かせるなんて真似を……

「…信じてくれて、ありがとう」

「いえいえ、万が一坂本君が、復習をしていたら、危険な可能性があつたからね  
霧島さんが大切な思い出に縛られないで居てくれたことに感謝するよ」

と俺は、微笑みながら頭を撫でる

この子普通にしていれば細かい仕草とかも、カワイイよなあ……………

ニコナデポ 発動中（ルル本人は無自覚です）

「さて、それでは、戦後交渉といきましようか」

何故かその言葉とともに、土屋君がカメラを構え始めたのだが……

「まずは、クラス間試召戦争の勝敗についてだが、Fクラスは三ヶ月間の試召戦争の禁止を条件に、設備のダウンはなしつまり今回は和平交渉により引き分けとすることを提案する」

「設備を下げなくていいのか？」

「いいよ別に、むしろ一段回あげてあげたいくらいだよ、俺個人としてはね」

女の子もいるんだし、あの環境は酷すぎる

さて、どうする受けるかい？」

「仕方ない…受けるしかないが、他のクラスから宣戦布告された場合はどうしたらいい？」

「それは既に西村先生を通じて、学園長に話は通してある」

「そうか、それなら受けるしかないな  
だが、そんなんでいいのか？むしろ普通に負けたときより、設備  
が下がらなくなったとなるだけで俺達にメリットしかないじゃない  
か」

「お前達のデメリットは、そうだな…三ヶ月後から更に三ヶ月、A  
クラスに宣戦布告することを禁ずる

これでどうだ？」

「それでかまわない」

やったね！これで半年間静かに過ごせそうだ！

「さて後は、一騎打ちに負けた者には勝った方という事を一つ聞いて  
もらうというのだが」

スツと久保君が前に出た

「僕からいいかな、吉井君」

あれ…久保君に対して吉井君をあてたのは失敗だったか！？

BL臭がすごいする！

「僕にできることなら言つてよ、久保君」

「今度の休み、買い物に付き合ってもらえるかい？」

「ん？そんなことでいいの？」

吉井君……アディオス……君が純潔でなくなることに、黙祷……

「さて、次は、木下さん……は弟だから勝手にやってくれ」

「ええ。」

「土屋君から工藤さんへのお願いは？」



「…………写体になってもらう」

「ムッツリー二君、ボクのナニを撮りたいのかな？」

工藤さんはそういつつ、挑発するようにスカートをススツとあげていく

土屋君が何かを想像して、鼻血を噴いたのは言うまでもない

まったく…FクラスだけじゃなくてAクラス連中も充分騒がしいよ……

「さて、次にエヴァ？」

「ん？ああ、私は頼むような事はないな…私の権利はルルにやる」

あら、そうなの……

「っていうことで、島田さんにも俺のいう事聞いてもらおうかね」

島田さんと姫路さんね……

「あ、姫路さんには、Fクラスの男子全員に、御菓子でいいから作  
つてきてあげること」

「そんなのでいいんですか？」

姫路さんと島田さんはキョトンとしている

姫路さんの料理の危険さを知る者は、恐怖に顔をゆがめ

そんなことを知らない男達は、嬉しさに舞い上がり騒がしくなる

「島田さんはそうだな……」

「何よ……？」

「君の事は詳しくないからなあ……とりあえず思いついたら言っから、  
連絡先教えてもらっていいかな？」

島田さんの件は保留そして最後…

「最後に霧島さんだね」

「…（コクッ）」

スツと坂本君の前に歩いていく

「…雄二、小学生の時からずっと好きだった」

「それか…もう諦めろ」

「…話しは最後まで聞いて」

もう聞きたくないというような態度をとる坂本君に、真剣な目で霧島さんが言った

「…今も好きそれは変わらない、だけど別に気になる人もいる」

「ッ……！」

想定外の発言に坂本君は目を見開く

「……雄二が好きな自分に縛られてたのかもしれない

……友達もいなかった私に、話しかけてくれた雄二の優しさに甘えていただけなのかも知れない

……雄二のことは気になる、それが幼馴染としての気持ちなのか、好きだからなのか、わからなくなった……

……それでもやっぱり雄二の事が好きなんだって思えたら、またそれを伝えるから

……今は昔みたいに、友人として仲良くしてほしい」

なんか、凄い原作と変わってるんだけど、何がおきた？

ここで、雄二の事が好き、付き合ってたって言うはずじゃ？

どうなってんだ……？

お前がニコナデボ発動したせいだボケエ！BY作者



第4話（後編）〜霧島さんの発言が原作と違う…まさかの霧島フラグ建設！？〜

K「さてさて、なんか淒くやらかした気がする」

翔子「…？」

K「つてあれ！？なんでルルじゃなくて霧島さんに変化してらっしゃるの？」

翔子「…ルルーシュならエヴァンジェリンさんと帰った」

K「ありや・・・じゃあ自分も失礼して……」

翔子「…？」

作者逃走のためナレーションがお送りします

ご覧頂きありがとうございます

感想等いつでもお待ちしております

また評価やお気に入り登録してくださると作者が、シャチホコの真似をするように体をのけぞらせて喜びますので、是非ともお願いいたします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4598z/>

---

俺と俺の嫁（エヴァ）と召喚獣だと？（仮タイトル）

2011年12月21日22時55分発行